

吉崎における中世的景観と近世的景観

— 絵図を通してみた —

金 井 年

一 はじめに

歴史地理学において絵図を扱う場合、基本的には二つの視点が考えられる。一つは絵図そのものの地図学ないし地史的考察であり、もう一つは絵図を用いての景観復原である。前者については城下絵図史に関してこれまでかなりの研究の蓄積がみられ、最近では矢守一彦氏の一連の業績があげられる⁽¹⁾。さらに、「城下絵図を用いてプランの形成・変容過程、また城下の空間構成を論述する方法は、今日ではむしろ一般的」⁽²⁾であり、地理学に限らず他の分野においても多種多様な研究が行なわれている。

このように絵図を利用した城下町研究は百花繚乱の観を呈しているのだが、それ以外の歴史的都市の研究においてはかかる観点からの研究は充分であるとはいえない⁽³⁾。これはもちろん資料の乏しさにも起因する。一方、絵図による復原的研究も、これまでわが国ではあまり本格的に行なわれていなかったように思う。この理由の一つは、町全域の復原は特に広域に渡る場合には困難であることによるためであろう。筆者も金沢について文化八年(一八一一)時の町割、屋敷割の復原図を作製したことがあったが、部分的なものにとどまった⁽⁴⁾。町の改変の程度に非常な差の

表1 吉崎の古図

	吉崎御坊	吉崎浦
中世	★1. 吉崎山絵図(文明年間)	
近世	★2. 吉崎山絵図(延宝5年, 東御坊→幕府) ★3. 吉崎山絵図(同年ごろ, 西御坊→幕府)=5. 越前国吉崎山之図 ★4. 越前国吉崎浦近辺絵図(同年ごろ, 福井藩→幕府) ★6. 吉崎御坊総絵図(文化11年以降)=7. 吉崎御坊総絵図 8. 越前国吉崎真景(江戸末期)	1. 吉崎浦牡蠣塚絵図(寛永5年) ★2. 吉崎浦絵図=3. 吉崎浦絵図 4. 北瀉曲江図(文化年間) 5. 北瀉湖周辺之絵図(幕末)
近代	9. 吉崎山之全景(明治32年)	6. 三国領吉崎浦絵図(明治4年以降) 7. 吉崎村字限大全図(明治16年) 8. 福井県・石川県境界図(明治17年)

(注) 整理番号は土屋氏による。★は本稿でとりあげたもの。

あったこと、全市域をカバーするには資料の片よりがあったことなどがその原因であった。しかしこれが小規模で、かつ都市化が進んでいない集落になると、困難さはかなり軽減されるケースもある。そこで本稿ではそのような例として、蓮如上人の建設した最初の寺内町である吉崎をとりあげ、絵図類を主な資料としてアプローチしてみたい。吉崎は以後に建設される寺内町のテストワークであると考えられるが、その研究は次節にあげるような書を除いては、多くを数えない。したがって、このような復原的研究は意味のあることと考える。

二 吉崎の古絵図

吉崎関係の絵図については既に土屋久雄氏が調査を行ない、一書にまとめたものがある(5)。これは各絵図を時代順に配列し、その成立の経緯、特色について述べており、吉崎の絵図のほぼ全体像を知ることができる。ところが、実際には記載の全く同じ、ないしかなり似かよった内容のものがみ



写真 1 「蓮如上人火難の図」(部分) [吉崎寺蔵]

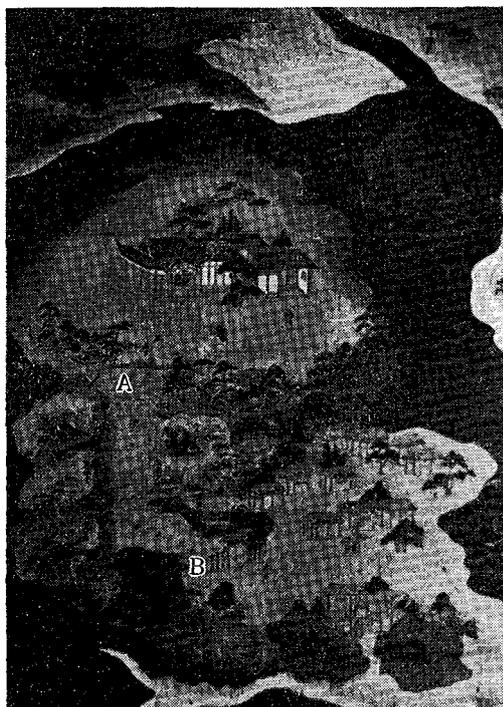


写真 2 「吉崎御坊絵図」

[滋賀県多賀町保月, 照西寺蔵, 土屋久雄『古図からみた吉崎御坊跡』による]

られる。ここでは地図史的アプローチというよりむしろ景観復原に重心を置いているので、類似の絵図からは一つをサンプルとして取りだせば充分と考えられる場合もある。そこでまず土屋氏による絵図のリストをさらに表1のように整理してみる。番号を横にならべたのは原図が一つであったと思われるものを示す。本稿ではこのうち★をつけたものをとりあげ考察してみたい。なお地図は通常一般図(general map)と主題図(thematic map)に分けられるが、古図をどちらかにふりわけるのは難しい。作製目的からいえば主題図的なものが多く、当然記載内容により発言しう

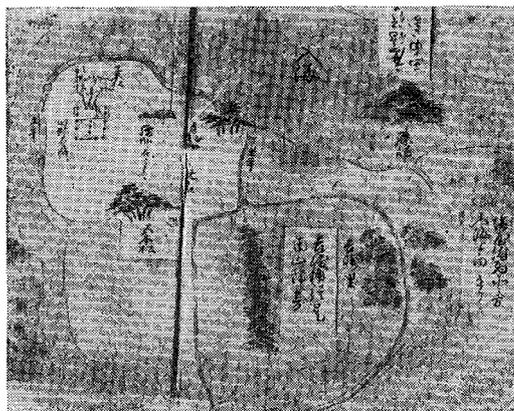


写真 3-1 「吉崎山絵図」山上付近 (部分)

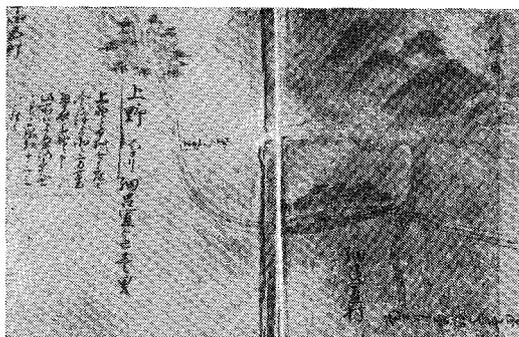


写真 3-2 同 上 (部分)

〔福井県立図書館蔵〕

ることがごく限られてくる。ただここでは何らかの形で「復原」という目的に合致するものを作りあげているのである。

〔絵図一〕「蓮如上人火難の図(6) (写真1) この図については既に前稿(7)で紹介したもので詳細は省くが、山上の御坊、麓の集落という垂直的關係がみられる最初の絵図といえる。しかし蓮如上人の退避というスト

リーを描くのが主目的であって、他の記載はその背景、ないし付加物にすぎない。またこれには次の〔絵図二〕のような多屋の記載が全くない。

〔絵図二〕「吉崎御坊絵図」(写真2) 鳥瞰図風で地図としては不完全なものであるが、貴重な資料には変わりない。これによると平地部の家屋は萱ぶき、荒壁で当時の一般的なつくりといえる。家並はある程度の統一がなくもないが、あまり整然とはしていない。のちの計画都市Ⅱ寺内とはやや異なる印象をうけるが、他の寺内町もあるいは当初はこういう景観を呈していたのかもしれない。この絵図では北大門の下あたりに一〇軒の家屋が描かれているが、



写真 4-1 「吉崎山絵図」山上付近 (部分)

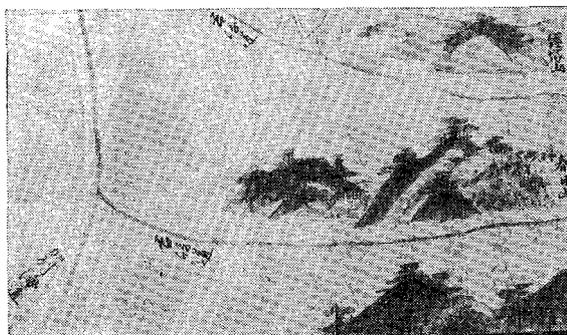


写真 4-2 同 上 (部分)

〔福井県立図書館蔵〕

屋根型からみると六軒が入母屋、四軒が切妻風にみえる。この点からしても当時の集落の一般的傾向と同様、農村とも町屋とも判然と区別できないものであったのではないか。

絵図にはさらに多屋九房と南・北大門が記されており、それによって馬場大路をはさむこれらの配置が明らかになり、その点でも重要な絵図である。ただしそれらの位置もあまり厳密なものではないと思える。なお、平地部から吉崎山上に至るにはかなり道路の傾斜が急であり、特殊な事情がない限り建造物などがつくられるとは考えられない。

多屋が「寺内町の防衛軍の屯所であり、その兵站的基地としての機能も果たした」⁽⁸⁾という指摘はこのような地形条件からみても当を得ている。逆に平地部の家屋が戦時になると第一に犠牲になることも位置からみて当然であろう。最後まで防御すべきは御坊であって、発想が城下町的である(御坊を城に置きかえるとよい)。

〔絵図三—a〕「吉崎山絵図」⁽⁸⁾(写真3—1・2)、〔絵図三—b〕「吉崎山絵図」(写真4—1・2)、〔絵図三

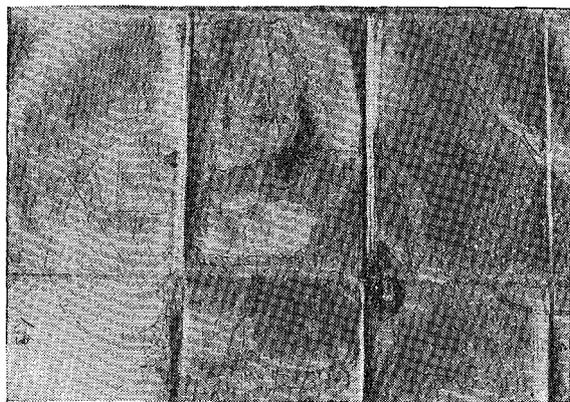


写真 5 「越前国吉崎浦近辺絵図」山上付近（部分）
〔福井県立図書館蔵〕

らである。逆に a 図のみにスケールの記載がない。このように三枚とも力点のかけ方が若干異なっている。

山上付近の形態、描写が一番正確かつ刻明と思われるのは c 図であり、その意味では最もよく目的にかなっている。a 図は集落景観がかなり具体的であり、例えば細呂木村では手前の川にかかる橋、町への入口にある門、柵まで描かれている。ただし全体としては概略を示すにとどまる。また a 図（それに b 図）の絵図の特徴は吉崎付近のルート・マップとなっており、つまり金津―（十四く五町）↓上野―（菴里）↓細呂木―（菴里平）↓吉崎と

― c 〕「越前国吉崎浦近辺絵図」（写真 5） この三枚の絵図は延宝五

年（一六七七）、吉崎山上の旧跡について東西両派が争ったとき、a 図は東御坊側から、b 図は西御坊側から、c 図は福井藩から、それぞれ幕府に提出されたものである。この三枚を比較するのは仲々興味深い（表 2）。いずれもその時点における吉崎山の遺跡を明確に提示することを目的とする主題図といえ、それ以外の記載については、簡略化ないしデフォルメされている。例えば集落の記載はかなり雑であり、その表現については表 2 の通り景観図風あるいは団塊状である。ついでながら c 図により吉崎が加賀と越前に分割されていたこと、b 図により当時の吉崎の集落が「家数百三十間余^(町)」であったことが知れる。

旧蹟地の記載物については、これも当然ながら殆んど重複している。b・c 図に「土平（＝土塀）」の記載がないのは不必要と考えたか

表 2 近世「吉崎山絵図」3図葉の比較

絵図	絵図の色彩				集落の記載	旧蹟地のスケール			旧蹟地の記載物****				
	水系	道路	集落	山地		東	西	南北	三本松	五本松	腰掛石	礎石	土手
a 図	水色	赤*	黄	緑	景観図風	ナ	シ	ナン	○	○	○	○	○
b 図	〃	〃*	〃	〃	団塊状	70余間	70間		○	○	○	○	×
c 図	〃	カキ色	ピンク	〃**	〃***	70間	65間		○	○	○	○	×

注) *道全体でなく、中央に赤線を入れている部分がある。 **●マークで記載を統一。 ***吉崎を除く。 ****b 図については名称の記載がないが、明らかにそれとわかる描き方である。

いう距離が示され、また七カ所に貼紙がしてあるが、そのうち五枚は「―従是へ寄」という書式のもので、例えば「鹿嶋従是西南へ寄」、「塩越之松従是南へ寄」などと、その地点から鹿島、塩越之松等々へ行く方向を示してある。

b 図は山、樹木、吉崎浦の家並がかなり写実的であるが、道路の形はかなり整形されている。道の記載は各々で異なり、一番詳細に描いてあるのがこの b 図、一番省略が行なわれているのは a 図である。いずれにしても(特に a・b 図)形は正確ではない。それから先述の「吉崎山絵図」(10)と比べてみると、家屋形態の変化がみられる。つまり「絵図二」でみられたシンプルな切妻が姿を消し、「寄棟や切妻に比べてやや複雑で、技巧的な構成である」(11)入母屋造りに変貌している。景観上は町屋的要素がみられないのであり、街村というのが当たっているよう。

以上やや仔細に検討してきた。いずれにせよこれら三枚の絵図からいえることは、この時期の吉崎は近世末期の門前町の景観とは全く異なっているということである。これについては「絵図四」のところで述べたい。ただ留意を要するのは「吉崎ノ里」と「吉崎浦」との混同である。a 図には前者、b 図には後者がでており、図面を見比べてもズレている感じだが、おそらく別の集落という意味ではなく、吉崎の沿岸部という意味の吉崎浦と、集落としての吉崎浦が混乱している

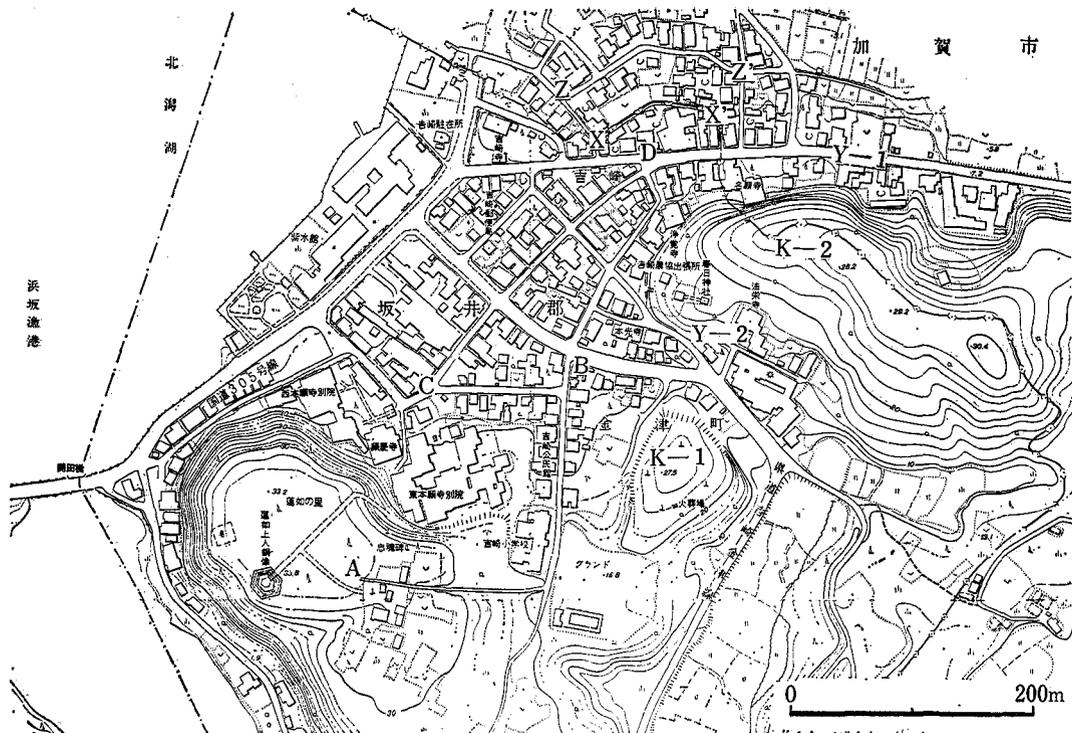


図 1 吉崎付近・国土基本図

〔図中のA～B, C～Dは中世および近世における主要道を現状に比定したもの。写真 2, 6-1 を参照〕

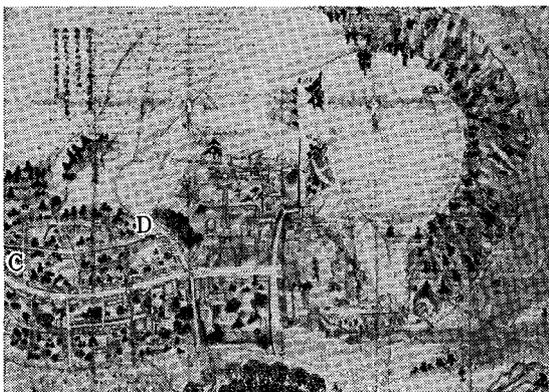


写真 6-1 「吉崎御坊総絵図」

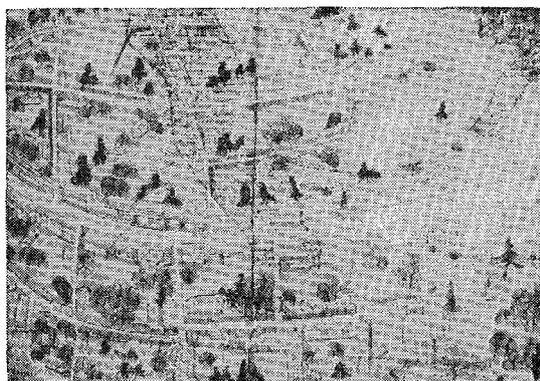


写真 6-2 同 上 (部分) [願慶寺蔵]

のであろう。すなわち a 図では集落名を「吉崎ノ里」とし、沿岸部に行くのに「吉崎浦従是南山際へ寄」と示しているであろう。b 図での吉崎浦は先述のように集落を示している。ちなみにこの集落は名前・位置から推して漁村的性格を有していた可能性が高い。なお写真 4-2 の「経塚山」は字名(註)から察しても図 1 の K-1 (現在は大部削られているが、もともとは北東へ西に広がっていったと考えられる)であり、この部分が墓地になっていることとも符合する。同じく春日山は K-2 であり、「吉崎道」にあたるのが Y-2 ということになる。

ここで付言したいのは、吉崎の道路およびそれに沿う町並がうまく地勢と一致しているという点である。つまり Y-1 は C-D とつながる。この C-D が門前町吉崎のメインストリートであるが、その北側の X-Z が湾曲した道路であり、したがってこれらも近年につくられたものではなく、かなり以前から存在した自然道なのであろう。土

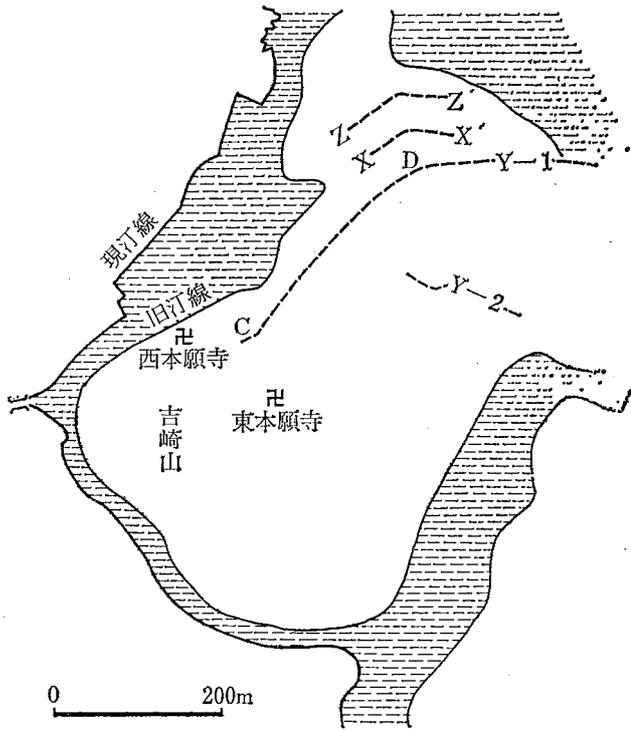


図 2 吉崎の原地形

地の高低からもそれはわかる(図2)。またC、Dは汀線と平行に走り、これも地勢上、自然である。

図といつてよいもので、作製目的は判然としない。これにより近世末期の門前町の密集した町並をうかがい知ることができる。御坊前に至る道路に面した家屋(おそらくは商店が多い)はほとんど二階建てで、瓦屋根になっている。ただしそれ以外では家屋の密度もそれ程ではなく、平屋で萱ぶきらしいものも多くみられる。あちらこちらに柵がみ

〔絵図四〕「吉崎御坊絵図」(写真6
—1・2) 図の左上方に「享保七年本願寺掛所ト相成、勅願所吉崎御坊ト申候。西御堂文化十一戊年福井御坊兼帯ト相成、吉崎兼帯所ト申候」とあることから作製年代は文化十一年(一八一四)以降、西本願寺側の手によるものということはわかるが、詳細は不明である。この絵図は図法からみると鳥瞰図で、一部は立面図(建物・樹木などを正面からみる感じで描く)、記載内容からみると一般

られるのは、もともとは海風よけの柴垣であろうか。倉らしいものも存在する。ともかく町の景観をかなり具体的に把握することのできる絵図で、その点では他の絵図とは比較にならない。

ここで問題にしなければならないのは、「絵図三—a—c」にみられたような家並がこのような門前町の景観にいつ変化したのかということ、つまり町屋化の時期である。常識的に考えても、これは核となる寺院の建立と平行している。西本願寺の本堂は延宝六年（一六七五）に建立され、一方、東別院は延享四年（一七四三）の新築にかかるものである¹³。また、東本願寺での蓮如上人御正忌法会がはじめられたのは、宝暦二年（一七五二）三月のことであり¹⁴、門前町の賑わいがみられるようになったのはそれ以降であろう。すなわち門前町の形成は早くみて、一八世紀の終りごろから認められるのではなからうか。そして吉崎へは北陸街道の支線（写真4—2の「吉崎道」）が流入しており、これが町の発展を促すことになったのは疑いない¹⁵。

さてこれらの寺院が吉崎山山上ではなく麓に建設されたのは、次のような事情による。

先にふれたように、吉崎山の所有をめぐって延宝年間に東西両派の争いがおこるのだが、これはもとをたどれば江戸幕府による本願寺の分立が遠因である。この争論およびそれに対する寺社奉行の裁断については『金津町史』¹⁶に詳しいが、結局どちらの主張も認められず、「論所の旧蹟要害の地たるにより、破却仰せ付けられ候。自今以後双方より旧蹟へ手入れ仕るべからず。開山法事の儀は山下の道場にて執行いたすべく」¹⁷云々という判決が下された。

吉崎は門前町の形態からみると、町並の端に寺院が位置する形、すなわち周辺位置型¹⁸である。しかしそれは偶然そうだったという要素もある。もし山上について東西どちらかの独占権が認められていたならば、吉崎山山上に寺院が建立され、実際とは異なる門前町の景観が現出したかもしれない。

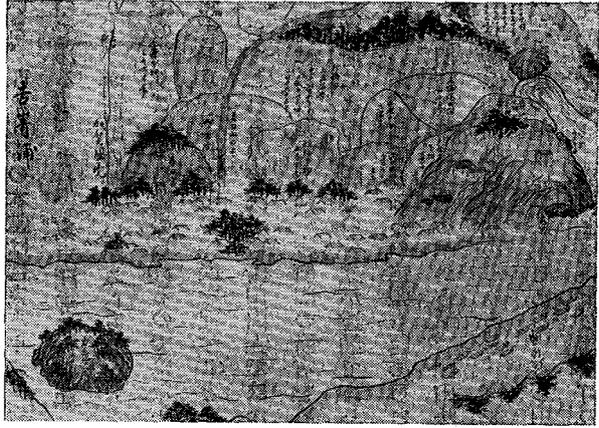


写真 7-1 「吉崎浦絵図」主要部分

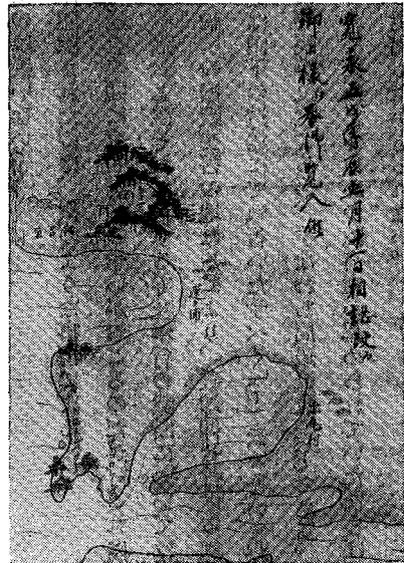


写真 7-2 同上 (上方の記載)

〔願慶寺蔵〕

なお図

右上方に
みられる
屈折した
道が「七
曲りの
道」であ
る。これ
は吉崎山

と舟着き場を結ぶ近道であったとされている(19)が、もちろん蓮如時代のものであり、それが近世後期になってもなお存在していたことがわかる。

〔絵図五〕 「吉崎浦絵図」 (写真7-1・2) この図につい

ても既に前稿(20)で一部を紹介したが、ここで再びとりあげる。まず図法からみると景観図の一種であるが、鳥瞰図とはいえない。なぜなら図の上方と下方では屋根・文字の向きが逆である。これは江戸期の村(町)絵図全般にいえる特徴であろう。図の右上方には、「寛永五年戊辰五月十一日相認改而御上様江奉御覧入候」とあり、記載は例えば「正庵中畑九百歩」とか、「経塚下畑五百歩」といったように、まず字名、次に畑の上・中・下の等級

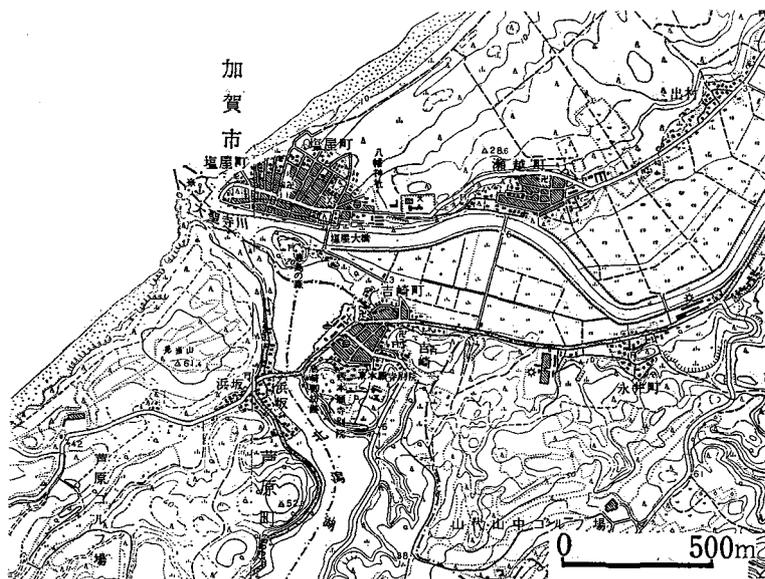


図3 吉崎付近地形図〔1:25,000「大聖寺」,「北潟」
昭和44年測量, 56年修正測量による〕

が示され、さらにその面積が記されている。田については「打越田上九百歩、中千二百六十申、下千九百卅五申、合四千九十五申」などと書かれており、やはり字名、次に上田と下田別の面積が示されている。要するに「御上様」に「奉御覧入」するための耕地の現況報告図である。この絵図により「〔絵図三―a〕c」より早期のものであり、当然まだ門前町には発展していなかったが―近世初頭には既に吉崎山の麓に集落が形成されていたことがわかる。それは先に指摘したように村落といつてよいものであった。また集落の記載はこの絵図の主目的ではなかったと思われる、その概略を示すにとどまっている。つまり統一の屋根型マーカーで家並が描かれており、むしろ模様といった方がよい。

さて図左下に「カシマ(鹿島)」がみられる。これは今までの絵図にもできてはいるが、現在は陸続きとなつて陸繋島(Land-tied island)の形態をなして

いる。さらにこの図と現在の地形図(図3)とを見比べたい。絵図では家屋が現大聖寺川のかかなり近くまで寄っており、そこには水田の記載はない。ところが現在ではかなりの規模の水田が町の北側に形成されている。これはかつての大聖寺川がこれらの水田地域にまで及んでいたことを示唆している。空中写真でみると、これらの水田が極めて低平な場所を占め、集落との間に明確な段差を生じていることが読みとれる(図2参照)。鹿島が陸地とつながった姿をみられるのは、明治三二年(一八九九)に刊行された渡辺市太郎編『若越宝鑑図録』に掲載されている銅版画においてである(21)。ただしそれ以前については残念ながら不明である。以上のことから次のように言いえるであろう。鹿島と陸地を結ぶ陸繋砂州は近世後期以降に発達し、末期には架橋(22)ができる程の間隔となっていた。そして遅くとも明治三〇年ごろまでには陸続きとなった、と。

三 おわりに

絵図を手がかりとし、主として吉崎の景観変遷について述べてきた。吉崎の場合、沿岸部の埋めたてが行なわれたりして地形の改変がひどく、地形的側面からの考察も必要であり、それについても若干のべた。

要するに蓮如時代の吉崎については町が完全に消失したため、概略を知りうるにすぎない。そしてそれはむしろ村落(的)景観に近いものであった。かつて筆者は寺内町の「農村的」↓「都市的」というプロセスを設定したことがあった(23)が、吉崎も当初は「農村的」寺内町からスタートしたといえる。もちろん「都市的」に発展する前に集落は消滅したのであるが。

門前町吉崎はそれとは全く別の範疇のものであり、江戸期の他の門前町と同様、多分に行楽地的色彩を帯びていた

と考えられる。本稿では江戸初期から門前町の形成に至る変遷について、絵図をもとに考察してみたわけである。

注

- (1) 矢守一彦「米沢城下絵図史について―地図史的考察の試み」史林五六―二、一九七三、同「福井城下絵図史について」『歴史地理研究と都市研究』上巻、大明堂、一九七八、同「金沢城下絵図史について」史林六二―三、一九七九
- (2) 矢守一彦「都市史研究と古地図」(豊田武他編『講座・日本の封建都市』第一巻、文一総合出版、一九八二)三九〇頁
- (3) その点、寺内町貝塚・富田林をとりあげ、各種古地図・地籍図から町の建設時のプランと拡大過程を明らかにした水田義一氏の論稿は注目に値する。水田義一「寺内町貝塚の変容」和歌山地理、創刊号、一九八一、同「寺内町の建設プラン」(前掲(2))所収、一九八二
- (4) 拙稿「文化八年『町方絵図部分図』による金沢の町割・屋敷割の復元」金沢経済大学論集一五―一、一九八二
- (5) 土屋久雄『古図からみた吉崎御坊跡』金津町教育委員会、一九七六
- (6) この絵図(文明七年)は土屋著には載せられていない。拙稿「吉崎御坊と真宗門徒」(藤岡謙二郎監修『北陸道の景観と変貌』古今書院より発行予定)を参照されたい。
- (7) 前掲(6)
- (8) 西川幸治「寺内町の形成と展開」(『日本都市史研究』日本放送出版協会、一九七二、三九〇頁)
- (9) いずれも福井県立図書館保管、松平文庫(松平宗紀氏蔵)による。分類番号はM75―7・8・9
- (10) この絵図の写しが東・西両本願寺にあるが、いかなるわけかそれらでは家屋の屋根型が入母屋式にかきかえられている。
- (11) 杉本尚次「民家の地理」(木内信蔵編『文化地理学』朝倉書店、一九七〇、一三八頁)。
- (12) 吉崎の小字地名については前掲(6)を参照。
- (13) 西本願寺については同寺発行のパンフレット、東本願寺については『金津町の文化財』金津町教育委員会、一九八二、一頁の記述による。
- (14) 坪内晋『蓮如上人御影像供奉記』一九七六、八頁。上人の御影を吉崎から京の東本願寺に運び、さらにそれを持ち帰

るといふことが現在でも行なわれているが、これはその同行記録である。ちなみに京に向うのを「お帰り」、再び吉崎に戻るのを「おいで」とよぶ。

(15) 寺内町の二般的性質として交通の要地に位置することがあげられるが、それは既に吉崎においてみられる。このような地理的条件については長沼賢海氏がいはやく着目している。長沼賢海「蓮如上人と一揆運動」(『日本宗教史の研究』教育研究会) 一九三八

(16) 『金津町史』金津町教育委員会、一九五七、九五～九九頁

(17) 前掲(16)、九六頁

(18) 藤本利治『門前町』古今書院、一九七〇、六三頁

(19) 前掲(5)、三二頁

(20) 前掲(6)

(21) この版面については前掲(5)二八頁をみられたい。

(22) 「絵図四」「吉崎御坊絵図」にその姿がみられる。写真6—1参照。

(22) 拙稿「寺内町の形態の類型とその変容」人文地理三三—三、二九八—、八四—八五頁

付記

絵図の撮影を許可された福井県立図書館、吉崎寺、願慶寺の関係者の方々、空中写真の閲覧と判読に御協力いただいた金沢大学理学部の粕野義夫教授、同じく文学部の守屋以智雄助教授、北日本測量株式会社、民家の形式について御教示いただいた金沢工業大学の土屋敦夫助教授、それに全体にわたって細かい御注意をして下さった金沢大学教養部の駒井正一助教授に厚く御礼申し上げます。